

## 成果と課題

新たな価値をつくり出せる子どもたちを育てるためには、そのカリキュラム開発において、「地域連携・校内研究改善・授業力向上」が必要であった。その3つの視点から改めて成果と課題について考察し、子どもの変容に結び付け本研究のまとめとしたい。

### ①地域連携

…「未来ものづくり科」のためのカリキュラム開発として、1年次・2年次ともに科学・環境、地域・伝統、幸せの3つの部会を中心に、単元開発を実施した。地域との連携については、1学年3社、2学年2社、3学年4社、4学年7社、5学年15社、6学年2社、合計33社と連携できた。

連携するために、「工場ミッケマップ」「ものづくりマップ 町工場プロフィール」「ゲストティーチャー連絡票」などを整えた。(別添参考資料参照)さらに、人材一覧表の作成と共に学校支援地域本部と協力体制を整えた。

◆ 連携することを継続できる体制、新しい連携先を見付けることが課題である。

◆ 地域の産業に親しみや誇りをもち、更に発展させるための発想力を第1～6学年の発達の段階を踏まえた継続的、発展的な関わりを意識した効果的な連携先・連携単元を計画的に開発する必要がある。

### ②校内研究改善

…2年間の研究を通して、校内研究の中に学年を超えた3部会方式を取り入れ、生活科・総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメントを進めた。また、令和2年度は、専科教員も含め21学級分の授業が実施できた。今年度は、担任でない他の学級で研究授業を実施するなどして、教科担任制に向けた研究方法を実施することができた。さらに、研究を支える年間を通してのミニ校内研修システムも継続できた。

◆ 教師の研究のための時間(カリキュラムの開発)の確保をするために学校全体の計画を見直す。

### ③授業力向上

…「未来ものづくり科」の研究内容には、各教科・各学年の指導内容を把握する必要があるため、学習指導案の形式を簡略化し系統性を意識して単元計画をまとめることができた。また、創造的な資質・能力(状況把握の力、発想力、形にする推進力)の素地をどのように養うかなど、各学年における児童の実態を整理することができた。

さらに、地域との連携を進めるにあたって、教員の外部機関との交渉力・調整力も向上することができた。

◆ より児童が主体的に単元に熱中するような指導の在り方・単元の組立てが課題である。

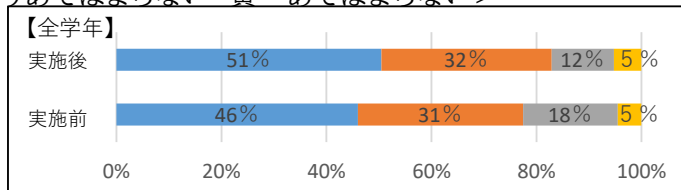
### ④児童の事前(令和3年5月)・事後(令和3年7月)アンケートの結果から

調査対象(1年77名、2年78名、3年104名、4年98名、5年89名、6年94名…合計540名)

<青…あてはまる オレンジ…わりとあてはまる 灰…あまりあてはまらない 黄…あてはまらない>

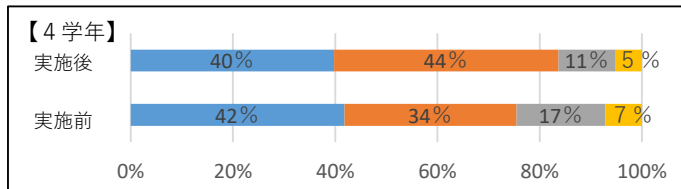
○「自分や周りの人のために役立つアイデアを考えることは楽しい」

肯定的な回答をした子どもの割合は、全学年において実施前の77%から実施後は83%となり、6ポイントの向上が見られた。



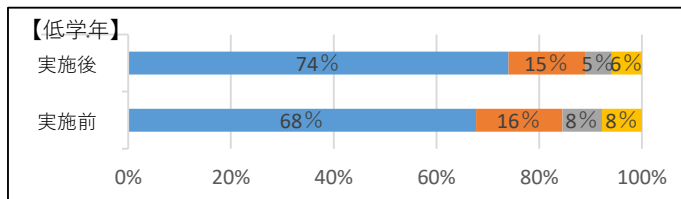
○「自分の考えたアイデアを友達に伝えることは楽しい」

肯定的な回答をした子どもの割合は、2年、3年、4年、5年において、向上が見られた。特に、4年生が実施前の76%から実施後は84%となり8ポイントの向上が見られた。



○「大田区の町工場で働く人たちの話を聞いたり教えてもらったりしてみたいと思う」

肯定的な回答をした子どもの割合は、1年、2年、3年、5年において、向上が見られた。特に、1・2年生は実施前の84%から実施後は89%となり5ポイントの向上が見られた。



### <考察>

低学年は、未来ものづくり科に対する取組に楽しさを感じるが、高学年になるほど、その内容に対する個々の資質・能力や興味・関心の度合いが大きくなるのが分かった。子どもが作成したものを町工場へのお礼として提供することで、地域とのつながりを深めることができた。実際に、一人一人がものをつくる活動を設定することで、試行錯誤し、粘り強く取り組む姿が見られた。

◆ 探究的な活動の流れや、相手や目的を明確にすることを意識した単元づくりに改善する。

◆ 課題に必然性をもたせる出会わせ方や、解決への見通しをもたせ方、表現・発信する場について工夫、改善する。

◆ 生活科、社会科、理科、総合的な学習の時間を中心に、疑問や問題から課題意識を高める問題解決型学習の進め方を意識させ、より「主体性」「粘り強く課題解決に向かう」資質・能力を高める必要がある。また、創造する力を高めるための「発想力」について意図的・系統的な指導方法が必要である。